

子育てサークルに参加する母親の育児への思い

尾関唯未、古澤洋子、森 礼子

Mother's a thought for childcare participate in Parenting Circle

Yumi OZEKI, Hiroko FURUZAWA, Reiko MORI

キーワード：子育て支援, 育児, 母子保健活動

はじめに

近年、核家族化により母親の育児負担は増大している。また望月ら(2014)は、家族や友人との交流が少なく孤立していると報告している。これまでの保健師経験においても、母親から様々な育児に対する思いを聴取した。その内容としては、「子どもと2人でいるとストレスがたまる」、「子どもに何を話したらよいかわからない」といったものであった。

育児ストレスに関する高石ら(2007)の調査では、一日中子どもだけを相手にして過ごす母親の育児ストレスが高いことを報告している。このことから、子どもと一日中過ごすことによって、育児ストレスが生じていると考える。

また、核家族化や育児の孤立という現状の中、乳幼児虐待が増加していることも懸念されている。医学や児童福祉の分野では、虐待に関する研究が増加し(山本,2011)、国の施策としては、虐待に対応することを盛り込んだ「子ども・子育てビジョン」が制定された。これによって、子育ては家族や親が行うものから社会全体で支えるという具体的な方策が挙げられた。しかし、虐待は減少傾向に至っていない。児童相談

所での児童虐待相談対応件数は、平成17年は34,472件であったが、平成26年は88,931件となり、年々増加傾向にある(厚生労働省,2014)。こうした現状の改善策として、厚生労働省(2014)は、すこやか親子21(第2次)計画をとりまとめた。その重点課題として、「親子が発信する様々な育てにくさのサインを受け止め、丁寧に向き合い、子育てに寄り添う支援の充実をはかること」を掲げている。また、2013年に地域における保健師の保健活動に関する指針(厚生労働省健康局長,2013)が改正された。その指針には、保健師が多様化、高度化する国民のニーズに応えていくことや地域における子育て支援の牽引役となることの重要性が挙げられている。

このような現状を踏まえて、母親が自身の育児をどのように捉えているかについて調査・把握することにより、多様化・高度化する母親のニーズに対する支援策を検討するための資料とする。

I. 調査の目的

A市内の子育てサークルに参加している母親

に「育児について感じること」を記述してもらい、母親が普段、自身の育児についてどのように捉えているかを把握する。

II. 調査方法

1. 対象・調査日

A市の子育てサークルに登録している母親30名のうち、2016年8月26日のサークル活動に参加した22名。

2. 調査方法

調査対象者に、調査の目的を説明し、無記名式自記式質問紙で「育児について感じること」について自由に記述するよう依頼した。調査に同意をした対象者が回答後、回収箱に投函する方法とした。

3. 調査内容

1) 基本属性

母親の年齢、子どもの数、子どもの年齢、普段主に子どもを養育している人、仕事の有無、勤務形態、育児休暇中か否か、母親の家族構成、同居者、育児相談者の有無、育児の相談者

2) 「育児について感じること」の自由記述

4. 分析方法

基本属性については、単純集計とした。「育児について感じること」に関する自由記述の回答にデータ番号をつけ、素データ一覧表を作成した。その中からデータの意味内容の類似性や相違性を検討しながら分類し、データの集合体をサブカテゴリーとした。同様にカテゴリーを生成し、母親の思いを表現するカテゴリーを命名した。

検討したのは、保健師活動歴が17～35年以上ある3名の保健師である。

III. 倫理的配慮

口頭で、調査の主旨を説明し、回答紙の提出を持って調査の同意を得た。回答紙は、記載者が特定されないよう配慮した。その方法として、人の出入りが少ない場所に回収箱を設置し、匿名で投函してもらうことにした。

子どもの安全に対する配慮としては、回答紙記載時は記載板を使用して、子どもの傍での記述とした。記載時は、2名の調査協力者が、子どもの見守りを行った。

本調査は、岐阜聖徳学園大学倫理委員会で承認を得た。(承認番号2016-18)

IV. 結果

1. 対象者の基本属性

参加者22名中11名(50%)からの回答が得られた。母親の平均年齢は、 33.1 ± 4 歳であった。子どもの人数については、3人3名(27%)、2人6名(55%)、1人2名(18%)であった。第1子の最高年齢は7歳5ヶ月、最低年齢は1歳6ヶ月。第2子の最高年齢は4歳7ヶ月。最低年齢は11ヶ月。第3子は全員2歳児であった。子どもの主な養育者は、全員母親であった。仕事をしている者は4名(36%)で常勤者1名(育児休暇中)、パート勤務者3名であった。母親の家族構成は、9名(82%)が核家族であった。実の親との同居者は2名(18%)、妹との同居者は1名(9%)、祖母との同居者は、1名(9%)であった。育児相談者の有無については、全員が有と答えている。育児の相談者の内訳は、夫10名(91%)、実母9名(82%)、実父6名(55%)、義母4名(36%)、義父2名(18%)、姉妹3名(27%)、友人5名(45%)、祖母1(9%)名、その他1名(9%)であった。

2. 「育児について感じること」に関する自由記述

表1参照

20のコードから、6つのサブカテゴリー、3つのカテゴリー(1)育児の負担感、(2)育児を楽しむ、(3)自分の育児のふりかえりを抽出した。

表1 育児について感じる事(自由記述)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
(1) 育児の負担感	①ストレス感情	・連続してことをすすめることが難しくストレスを感じる
		・やりたいことができなくストレスを感じる
		・ゆっくりできなくてストレスを感じる
	②イライラする感情	・言うことを聞かないのでイライラする
		・無意味に泣くのでイライラする
		・自分に余裕がないとイライラ子どもに向けてしまう
		・3人とも年が近いので、しょっちゅうけんかしてイライラする
		・1日があっという間でイライラする
	③感情コントロールがうまくできない	・自分自身でコントロールができない
		・1人の時間がもてないので気分転換ができない
		・兄弟けんかが増えて困っている
		・自分の感情に合わせて子どもと関わっている
(2) 育児を楽しむ	①育児の楽しさ	・色々楽しんでいる
		・だいぶ手が離れ、会話も楽しい
		・子育てが楽しいと思うときがある
	②子どもの成長	・子どもは、日々成長しやるのが面白い
		・育児の工夫や気の持ちよう次第でどうにでもなる
(3) 自分の育児のふりかえり	①育児の答え	・答えがないので難しい
		・自分の子育ては正しいのか
		・子育てに正解はないだろうが、ちょっと子どもをしめつけすぎていると感じている

1) 育児の負担感

(1) ストレス感情は、「連続してことをすすめることが難しくストレスを感じる」、「やりたいことができなくストレスを感じる」、「ゆっくりできなくてストレスを感じる」であった。家事をしようと思っても、子どもの世話で家事が中断となり、スムーズにやりたいことができなかつたり、自分自身の時間が持てなかつたりする現状から、ストレスを感じていた。

(2) イライラする感情は、「言うことを聞かないのでイライラする」、「無意味に泣くのでイライラする」、「自分に余裕がないとイライラ子どもに向けてしまう」、「3人とも年が近いのでしょっちゅうけんかしてイライラする」、「1日があっという間でイライラする」であった。1歳6ヶ月児を養育する母親が、「言うことを聞かないのでイライラする」、「無意味に泣くのでイライラする」と記述していた。したがって、1歳6ヶ月児の特徴的な行動が、イライラの原因となっていた。また、3人の子どもを育てる

母親は、子どものけんかがストレスの原因となっていた。

(3) 感情コントロールがうまくできないは、「自分自身でコントロールできない」、「1人の時間がもてないので気分転換ができない」、「兄弟のけんかが増えて困っている」、「自分の感情に合わせて子どもと関わっている」であった。育児をする中で、気分転換をする時間が持てず、自身の感情をコントロールできないと感じていた。

2) 育児を楽しむ

(1) 育児の楽しさは、「色々楽しんでいる」、「だいぶ手が離れ、会話も楽しい」、「子育てが楽しいときがある」。

(2) 子どもの成長は、「子どもは、日々成長しやるのが面白い」、「育児の工夫や気の持ちよう次第でどうにでもなる」であった。育児にゆとりが出てくると、子どもの成長を感じたり、育児を工夫したりして、楽しさを感じる事ができていた。

3) 自分の育児のふりかえり

育児の答えは、「答えがないので難しい」、「自分の子育ては正しいのか」、「子育てに正解はないだろうが、ちょっと子どもをしめつけすぎていると感じている」であった。このように記述したのは、6歳以上の子どもを持つ母親たちであり、子どもが成長していく上で、育児の答えを求める傾向が見られた。

V. 考察

現代の育児について田中(2011)は、子育て支援に求められていることは、「サービス供給に利用者の声を反映させること」が重要であると報告している。このことから、育児について母親が感じている率直な思いを知り、その思いに即した子育て支援内容を考えることが、今後の子育て支援の在り方を発展させる一助になると考え、調査を行った。その結果より、考察したことを以下に記す。

ストレス感情については、育児は毎日連続して繰り返す行いであり、いわゆる休業日はない。育児をする毎日の中で、自分のやりたいことができずストレスを感じている。このことから、ストレスが溜まってきた時に、子どもと距離を置き、母親がゆったりとした時間を持つことができるように、専門職である保育士による託児サービスを提供し、育児から解放される子育て教室などの開催が必要だと考える。

イライラする感情としては、1歳6ヶ月頃の子どもの持つ母親が「言うことを聞かないので、イライラする」、「無意味に泣くのでイライラする」と記述した。吉村(2011)は、1歳6ヶ月の子どものことについて、「感情表現が豊かになり、人見知りが強くなり、不快なものに対して恐怖心を抱く。また自立と依存の間を行ったり来たりしている時期だ」と報告している。しかし、この母は、“泣く”という行動を無意味な行動と捉えている。このことから、1歳6ヶ月児の特徴が理解できておらず、並びに子どもの発達に伴う行動が受容できないことでイライラ感情を表出し

たとえられる。したがって、発達の転換期にある子どもを育児する母親に対して、その特徴を伝え、母親が理解することによって、冷静な対処行動がとれるよう支援していく必要があると考える。

感情コントロールができないことについては、2人以上の子どもの育児をしている母親から、「兄弟けんかが増えて困っている」、「3人とも年が近いので、しょっちゅうけんかしてイライラする」といった記述があった。藤田(2012)は、「育児に関する否定的感情は、経産婦において有意に高い傾向がみられる。その背景として、子どもの兄弟姉妹関係への配慮や日常生活の世話の増加、母親の社会的活動や個人としてやりたいことの制限などが予測される」と報告している。このことから、2人以上の子どもの育てている母親に対して、その負担感について共感し、負担を軽減するための支援が必要だと考える。森ら(2012)は、託児サービスを案内するなど情報提供を行うことの必要性を報告している。したがって、早期から社会資源に関する情報提供を行い、母親の育児負担の軽減を図ることが重要だと考える。

また核家族、拡大家族の母親に関わらず、「自分自身でコントロールができない」、「一人の時間が持てないので気分転換ができない」、「自分の感情に合わせて子どもと関わっている」という記述があった。平成22年の幼児健康度調査では、22%の母親が「自分の時間が持てていない」と感じ、「何とも言えない」という母親を含めると47%にもものぼっている(日本小児保健協会, 2011)。高石ら(2007)は、子育て環境と子どもに対する意識調査において、「息抜きができない」ことがストレスになると報告している。こうしたことから、短時間でも自分のための時間を意識的に作るよう助言することが重要である。その一助として、短時間でできる家事や料理の工夫などを紹介していくことが考えられる。

野口ら(2015)は、夫のサポート不足が、育児ストレスに影響していることを報告している。

このことから、核家族化が進む現代では、夫のサポートを得ることも母親の育児ストレス軽減に向けて必要である。夫のサポートを得る方法として、岡田ら(2014)は、父親手帳を活用することを勧めている。普段仕事で忙しい父親に対しては、父親手帳を利用するなど、間接的な方法も用いて育児サポートの必要性を理解してもらうことを考えていかねばならない。

自分の育児のふりかえりについては、6歳以上の子どもを育てる母親から、「答えがないので難しい」、「自分の子育ては正しいのか」、「子育てに正解はないだろうが、ちょっと子どもをしめつけすぎていると感じている」という記述があった。育児にゆとりが出てくることで、育児を振り返り、子どもをしめつけているといった、罪悪感情を抱く母親がいる。吉野(2014)は、「子育ては、すぐに結果のでもものでも原因と結果が明確なものでもない。長い関わりの中で様々な要素によって進んでいるプロセスである。思い通りにいかない子どもを目の前にして、自信を失い困惑し、焦る親にとって小休止も交替もある」と述べている。このことから、子育て支援の場を通して、育児には完全なマニュアルはなく、正解を求める必要はないことを伝えていくことが大変重要だと言える。

VI. 結論

今回の調査対象は、子育てサークルに定期的に集まっている母親である。定期的に集まることで顔見知りになり、悩みを共有していると考えられる。しかし、今回の調査の中で、育児を楽しんでいる母親もいる一方で、子どもの発達に伴う行動に対するイライラ感や子どもの成長とともに母親が育児の答えを求めるなどの思いを抱えていることが明らかとなった。母親に寄り添い、育児に対する率直な思いを感じ取って支援することが、地域で子育て支援をする保健師にとって、重要な課題だと言える。今回は、11名の母親の記述と少数の意見であった。今後は、多くの母親の育児に対する思いを聴取し、母親

のニーズに即した子育て支援を検討していくことが重要であると考えられる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご尽力いただいたA子育てサークルの皆様へ深く感謝を申し上げます。

本研究は、岐阜聖徳学園大学看護学部助成金を得て実施した調査の一部である。

文 献

- 藤田大輔(2012)：乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響, 日本公衆衛生学会誌, 第49巻第4号, 305-312.
- 厚生労働省健康局長(2013)：地域における保健師の保健活動について, 健発0419第1号.
- 厚生労働省 健やか親子21(第2次) <http://sukoyaka21.jp/about> (2016年10月22日検索)
- 厚生労働省児童相談所での児童虐待相談対応件数 (<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html>). (2016年10月22日検索)
- 森礼子, 後閑容子(2012)：地域主催の子育て支援事業の分析, 保健師ジャーナル, 第68巻第9号, 800-807.
- 望月由妃子, 田中笑子, 篠原亮次(2014)：養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連, 日本公衆衛生誌, 第61巻第6号, 263-274.
- 日本小児保健協会(2011)：平成22年度幼児健康度調査速報版, 小児保健研究, 第70巻第3号, 448-457.
- 内閣府子ども・子育てビジョン <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/family/vision/pdf/honbun.pdf>. (2016年10月31日検索)
- 岡田みゆき, 伊藤葉子, 一見真理子(2014)：地方公共団体における父親の子育て支援, 日本家政学会誌, Vol.65 No.10, 587-597.
- 高石恭子, 穂苺千穂, 中里英樹他(2007)：子育て環境と子どもに対する意識調査, 甲南大学人間科学研究所, 1-47.
- 田中麻里(2011)：日本における子育て支援施策

の変遷－「エンゼルプラン」から「子ども・子育てビジョン」まで－,西九州子ども学部紀要, 第2号, 77-85.

山本政人(2011):発達心理学の動向からみた「母性社会」の行方、学習院大学文学部研究年報, vol.58 57-75.

吉村公一(2011):1歳6か月児健診, 子育て支援ハンドブック(初版) 83-89, 日本小児医事出版社, 東京.

吉野純(2014):「親の発達」の概念分析, 日本小児看護学会誌, Vol.23 No.2, 25-23.

Key words : Child care support, Child care, Maternal and Child health activity